

歴史的街区における街路評価の研究

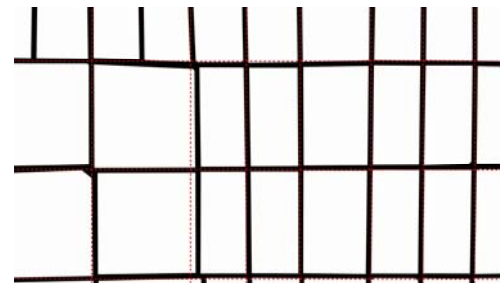
日大生産工(院) ○佐藤 裕介
日大生産工 宮崎 隆昌

1.研究背景と目的

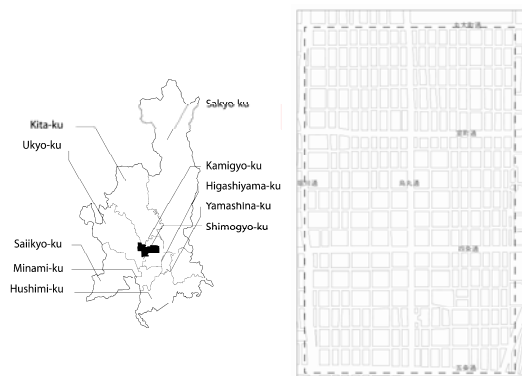
京都の歴史を見てみると794年の平安京遷都以来、都市は時代の流れと共に形態と機能を大きく変えながら発展し、現在の地域としての空間構造を形成してきたと考えられる。都の街路は朱雀御大路を中心軸として東西南北に基盤の目のような格子状を基本とした。平安期に右京城の衰退により朱雀大路は縮小されていくが基盤目の都市構造は残ることとなった。現在、京都の街路を抽象化すると基盤目の直線的な街路により構成されているように見える。しかし、実際には大路、小路、路地にわたり部分的な右余曲折、幅変化が見られる（図－1）。それらの形成過程には起伏などの地形的要因、戦災や火災後の復興においての障害の発生や、規制による影響、建物疎開などいくつかの仮説がたてられるであろう。またそれらによる視覚的影響や都市構造への何らかの影響も考えられるであろう。だが、それらこそが京都の都市を近代主義的都市計画によく見られる幾何的で秩序だった都市構造とは異なるものであると言わしめる所以なのではないだろうか。歴史的街区の秩序だった幾何的な平面プランにおいて部分ごとで計画されたかのように起こっている街路の曲折、突然の幅変化を「ゆがみ」と定義する。ゆがみを近代が排除すべきとして捉えた多様性、偶然性を含む秩序、非連続で非線形的な秩序の一つであるとして捉え、現在の京都における街路のゆがみの発生状況と構成に着目しその実態と全体としての傾向を明らかにすることを目的とした。本稿ではその中でも、ゆがみの差異の出やすい交差点、小路に着目し街路のゆがみの状況を二方から調査・分析し考察を行うこととした。

2.研究方法

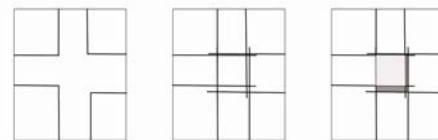
研究対象は京都市中京区、丸太町通、寺町通、堀川通、五条通に囲まれた範囲の小路、それ同士が交わる交差点とした。この場所はかつて平安京内部の左京に位置し、平安後期以降不振となった右京に対し人口の集中した市街となった。現在でも商業施設などが集中し活気を見せている。



図－1 街路のゆがみ



図－2 研究対象地域



図－3 交差点分析

3.交差点における分析方法

それぞれの小路において交差点から交差点までを一つの単位として始点、終点まで線を引いた。その線をさらに交差点まで延長し、それによりできる二重図形により評価を行った(図－3)。ゆがみが少ないほど内部の図形と外部の図形面積の差が少なくなりゆがみが大きいほど面積差も出てくる。その面積比率の多寡により評価を行うものである。なお、十字路でない交差点は分析不可として研究対象から外した。対象敷地内のすべての交差点における分析結果を以下にまとめた(図－4)。

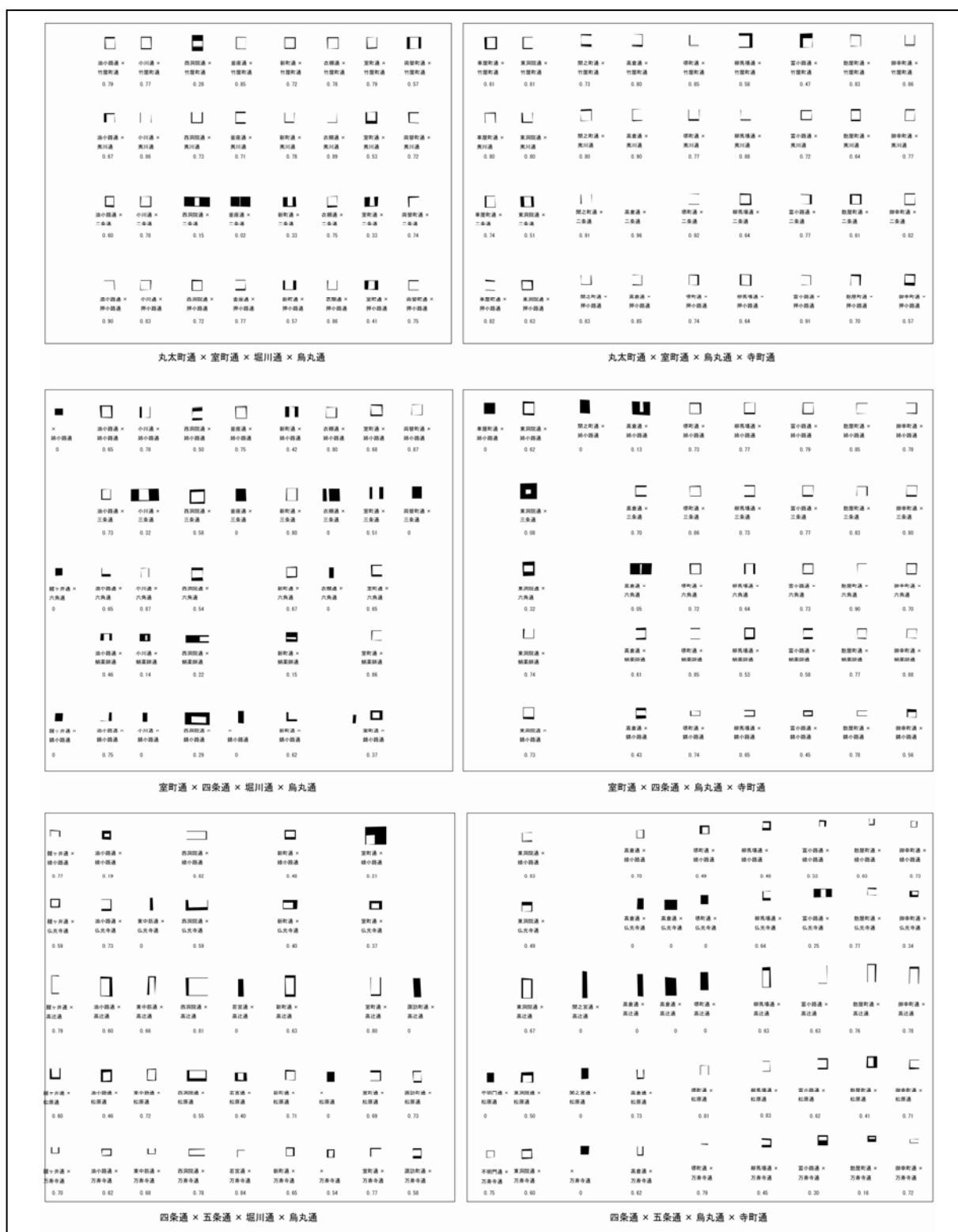


図-4 交差点におけるゆがみ

3.1. 交差点におけるゆがみ評価

分析により得られた結果を見てみるとまず交差点形状として明らかに不整形なものがいくつか挙げられる。主なものは西洞院×竹屋町通、西洞院×二条通、釜座通×二条通、高倉通×姉小路通、東洞院×三条通、高倉通×六角通、西洞院通×蛸薬師通、西洞院通×錦小路通、室町通

×綾小路通である。これらのゆがんだ交差点形状は視覚的にも関わってることがありえる。次に外部図形と内部図形との面積比率において評価をみた場合、室町通、四條通に挟まれたエリアにおいて街路のゆがみが多く分析不可となる十字路以外の通りも多いことがわかる。

京都の街がグリッド状の平面構成による都市として考えた場合、交差点における分析結果と比較したとき図－4 空白部に見られるように区画が他のものより区画が大きく分けられており他では街路が通っている位置に街路が通っていない箇所も多いことがわかる。

3.2 各区間でのゆがみ変化

内部図形と外部図形との面積比率を丸太町通、室町通、四条通、五条通の大路により挟まれた区間を一つの単位として南北で一つにまとめた結果次のことが得られた。

3.2.1 丸太町通～室町通間

夷川通との交差点においてほとんどの南北通りが0.7～0.9の高い水準を示した。また二条通との交差点では低い水準を示す通りが幾つか現れた。一定して高い水準を持つ通りと上下の大きい動きをしている通りが顕著に表れる結果となった（表－1）。

3.2.2 室町通～四条通間

ほとんどの通りが独自の動きをし、特に高倉通、東洞院通、新町通が大きな差を示した。また、常に一定の水準を保つ動きをする通りは殆どなく麩屋町通、堺町通、御幸町通ぐらいであるという結果となった（表－2）。

3.2.3 四条通～五条通間

室町通～四条通間に比べると、比較的通りが同じような動きを示していることがわかる。また高辻通との交差点ではすべてが0.6～0.8の高い水準を示した（表－3）。

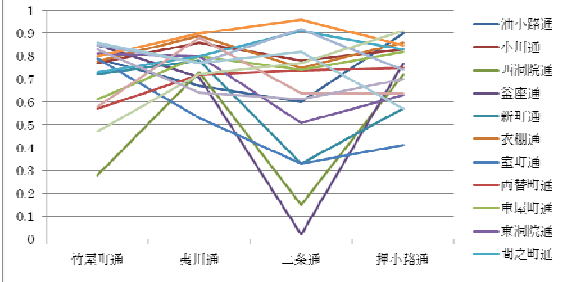
3.3

全体として似たような値を示すということではなくそれぞれ通りごとに特徴を示した。グラフを見てみると室町通～四条通間において特に差異が出ているように見えるが、高倉通、東洞院通、新町通などの一部の通りが大きな動きをしているためである。姉小路通、三条通での交差点ではほとんどの通りが0.5以上を示している。

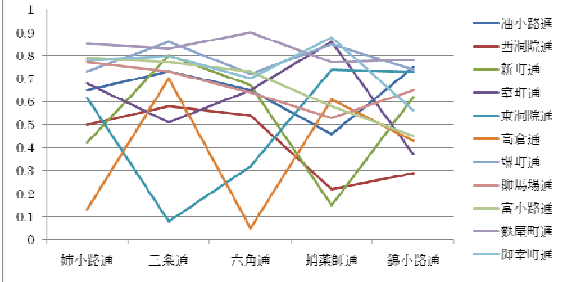
4. 南北の小路における分析方法

南北に走る小路の始点終点を大路に囲まれた範囲を一つの単位として考え、それぞれ小路を交差点ごとに分断し一定位置にまとめ分析を行った。（図－5）なお、通りの名をもたないもの、集約した通りの数が一定数に満たないものは分析対象から外すこととした。また、東西の小路は評価を行うデータ数が不十分なため本稿では分析対象としなかった。

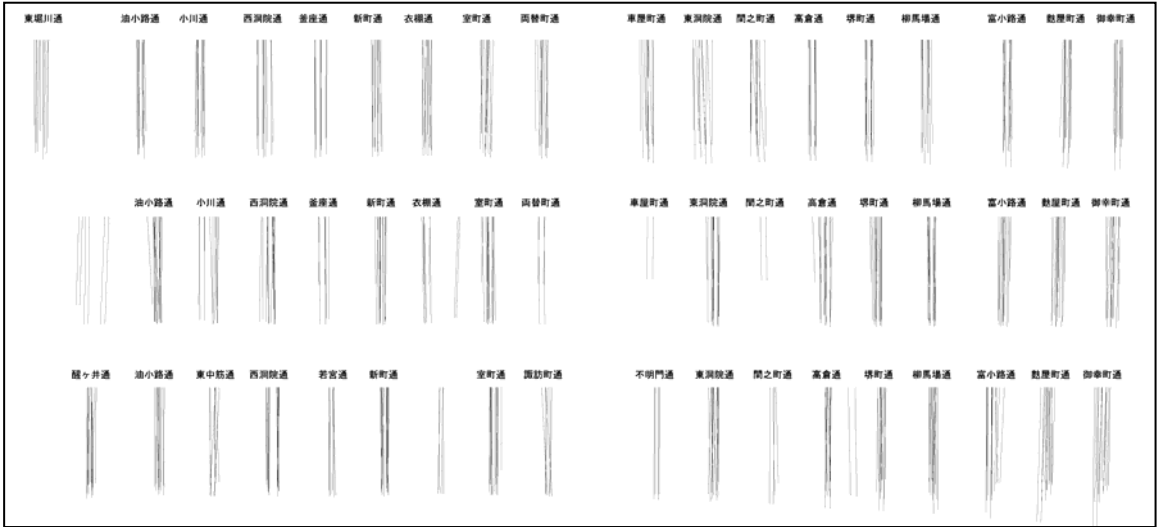
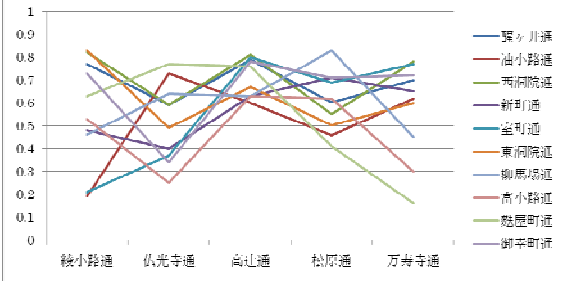
表－1 丸太町通～室町通間



表－2 丸太町通～室町通間



表－3 室町通～四条通間



図－5 南北の小路のゆがみ

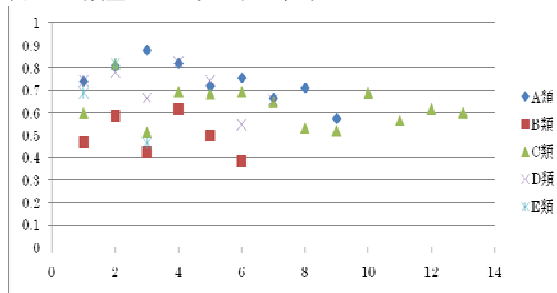
表－4 小路のゆがみ分類

A類	油小路通Ⅰ	小川通Ⅰ	高倉通Ⅰ	堺町通Ⅰ	富小路通Ⅰ	御幸町通Ⅰ
	釜座通Ⅱ	衣櫛通Ⅱ	岡替町通Ⅱ	柳馬場通Ⅱ	西洞院通Ⅲ	若宮通Ⅲ
	新町通Ⅲ	不明門通Ⅲ				
B類	西洞院通Ⅰ	釜座通Ⅰ	西洞院Ⅱ	室町通Ⅱ	東洞院通Ⅱ	高倉通Ⅱ
C類	新町通Ⅰ	衣櫛通Ⅰ	室町通Ⅰ	岡替町通Ⅰ	柳馬場通Ⅰ	麩屋町通Ⅰ
	油小路通Ⅱ	新町通Ⅱ	醒ヶ井通Ⅲ	油小路通Ⅲ	室町通Ⅲ	東洞院通Ⅲ
	高倉通Ⅲ	堺町通Ⅲ	柳馬場通			
D類	車屋町通Ⅰ	小川通Ⅱ	堺町通Ⅱ	富小路通Ⅱ	麩屋町通Ⅱ	御幸町通Ⅱ
	麩屋町通Ⅲ	御幸町通Ⅲ				
E類	東洞院通Ⅰ	間之町通Ⅰ	東中筋通Ⅲ	鷹訪町通Ⅲ	富小路通Ⅲ	

表－5 小路のゆがみ分類2

	A類	B類	C類	D類	E類
I a	2	2	4	0	0
I b	4	0	2	1	2
II a	3	2	2	1	0
II b	1	2	0	4	0
III a	3	0	3	0	2
III b	1	0	4	2	1

表－6 類型ごとのゆがみの平均



4.1 小路のゆがみ分類

得られた図においてゆがみ方の特徴ごとにA～Eに分類を行った。東西の大路ごとにまとめてあるため表上では、それぞれ丸太町通～室町通：Ⅰ、室町通～四条通：Ⅱ、四条通～五条通：Ⅲとおき、堀川通～烏丸通間をa、烏丸通～寺町通間をbとした。

A：通りを示す二本のラインを確認することができる。

B：通りの途中で半路分ずれたことを示す三本のラインを確認することができる。

C：線の集中している個所と集中していない個所を確認することができる。

D：比較的均等に線が分かれて配されており通りを示すものが確認できない。

E：ある程度以上の斜めの線が入っている。

区間ごとにそれぞれ特徴のある結果となった、Ⅰb、Ⅱa、Ⅲaの区間はA類に属するものが多くⅠa、Ⅲa、Ⅲbの区間はC類に属するものが多かった。Ⅱbの区間はD類が最も多く、他の区間とは特異な状態にあるといえる。

4.2 小路と交差点で得られたデータとの比較

次に、分類わけされた小路ごとに先で得られた交差点のゆがみの平均データと比較してみる。比較してみた結果それぞれの類型ごとに数値に特徴があることがわかった。A類：平均的に高い数値を示し安定している。B類：もともと得られたデータが少なかったが、全体的に低い数値を示した。C類：どの類型よりも多い類であり、0.5～0.7の間で変動する比較的安定したものとなった。D類：比較的安定しておりC

類と同じような変動を見せた。E類：一番得られたデータが少なかったが、変動が最も大きかった。平均値はそれぞれA類0.74B類0.50C類0.63D類0.71E類0.66となった。D類の数値が高いという結果がでたが、これはD類の通りとそれと交わる東西の通りが比較的直角に交わっていることを示している。すなわち通り全体が斜め方向に一定の角度を取って延びているということになる。E類の平均値はそれほど高くはなかったが、この類は数値の変動が大きかった。E類で数値のまるで異なる通りがまとめられた要因はD類と同様に通り全体が傾いている通りとカオス的状况に近づいている街路の2種あるためではないかと推測された。

5. まとめ

大路を一つの区分として交差点、小路の二つの要素から分析を行ってきた。まず交差点においては区間ごとに特徴の出る結果となった。丸太町通～室町通間では一定してゆがみの少ない通りとゆがみ方の変動が大きい通りが顕著に表れる結果となった。室町通～四条通間ではほとんどの通りが独自の変化を示し、特に高倉通、東洞院通、新町通が大きな差を示した。四条通～五条通間では室町通～四条通間に比べると、比較的通りが同じような動きを示していることがわかる。そして、四条通近辺に比較的ゆがんだ交差点が多く分布していることがわかった。また、四条通と烏丸通との交差点近辺では区画が大きくとられた箇所も多く存在した。次に小路での評価を行った結果、A類、C類、D類の通りが比較的多くE類の通りはあまり存在しないことがわかった。現在商業地域として活気を見せている四条、河原町近辺においてD類の通りが集中しているということがわかった。また、小路での類型分けしたものと交差点とのゆがみのデータを比較してみるとD類とE類の一部の数値が高いという結果がでた。これはD類の通りが何かしらの同じ条件のもとで同時に造られたのではないかと予測される。これはゆがみの少ないE類の一部の通りにも当てはまると考えられた。

「参考文献」

- 1) 丸山俊明：「京都の町家と町なみ一何方を見申様に作る事、堅仕間敷事」昭和堂 2007
- 2) 西川幸治 高橋徹：「京都千二百年（上）平安京から町衆の都市へ」草思社 1997
- 3) 西川幸治 高橋徹：「京都千二百年（下）世界の歴史都市へ」草思社 1999
- 4) 斉藤吉雄：「コミュニティ再編成の研究」御茶の水書房 1979
- 5) 金田章裕：「平安京—京都 都市図と都市構造」京都大学学術出版会 2007